

耶律楚材の隱逸思想について

白蓮杰

一 はじめに

後漢から六朝にかけて、王朝交代や社会混乱の最中に置かれた文人たちは、政治的権力の束縛から遁れ、真の自己実現をはかりたいがために、隱逸という生き方に関心を抱くようになった。『後漢書』卷八十三に「逸民列伝」が設けられたことや六朝文学に隱逸思想を詠った作品が多く作られたことからそれを裏付けることができる。

隱逸文学は晋の陶淵明によって一つの流派を形成して以降、唐代に至って孟浩然、王維らを代表とする多くの追隨者を輩出し、王朝交代の混乱期が長く続いた金、元朝にそのピークを迎えた。仕官を拒否し、抵抗し続けた金と南宋の文人たちは、世俗に妥協することなく、己の節操を守り抜いた陶淵明の高尚な人格に敬意を抱き、自分の陥った境遇を陶淵明に投影した。彼らの隱逸の意志を表した詩は元朝初期の詩壇の主流の一つであった。その中、チンギス汗に招かれてモンゴル王朝に仕官した耶律楚材も隱逸生活に憧れた詩人の一人である。

耶律楚材¹⁾（一一九〇—一二四四）、字は晋卿、号は玉泉、法号は湛然居士。遼（契丹）の太祖耶律阿保機の長男である東丹国王耶律倍九世の末裔で、遼の王族出身である。彼は契丹人の血を引きながら代々中国の文化に親しんだ漢化した家系に生まれ育ち、祖父の耶律聿魯、父の耶律履と共に金に仕えた儒家官僚の系譜に属するものである。耶律

楚材はモンゴル王朝の政治や経済の基盤固めに尽力した政治家だけではなく、またその時代を代表する文学者でもあった。耶律楚材の作品は現在七百首近く伝わっており、詩文集の『湛然居士文集』^②（以下『文集』と略記する）に収められている。

彼は官界に身を置きながら隠逸への憧憬を内容とした詩を数多く創作し、隠逸的志向をしばしば表明している。そこで、彼は隠逸に対してどのように考えていたのか。また、隠逸によつて何を追い求めたのであろうか。さらに、彼の隠逸志向は歴代の隠逸思想の中でどのような位置づけを占めるのか。こうした問題を明らかにすることで、モンゴル王朝草創期の文人たちの自己実現に対する模索の一端を知ることができると思う。

本稿では、まず、先行研究を踏まえて従来の隠逸思想の発生と展開を整理したうえで、右の問題意識をもとに、耶律楚材の隠逸に関する詩及び、現実における生き方の中において彼の隠逸観を考察したい。

二 隠逸の概念

隠逸とは何か。「隠逸」の語が見える最初の文献は『漢書』卷八十六何武伝「民有隠逸、乃当召見」であるが、「隠逸」と同様の意味で用いられた言葉は「隠居、隠者、隠士、逸民、隠耕」等と『論語』、『荀子』、『列子』などの文献に散見することは先行研究においてもしばしば指摘されている。^③

隠逸に関する記載は、早くも『易経』坤の文言伝に「天地閉りて、賢人隠る」、乾の文言伝に「世を遯るれども悶うることを無し」と見え、また『論語』の憲問篇に「賢者は世を辟く」、泰伯篇に「天下に道有らば則ち見われ、道無ければ則ち隠る」、先進篇に「邦に道有らば則ち仕え、邦に道無ければ則ち隠る」と見える。すなわち、儒者は経世済民を理想とし、政治の場で力を発揮することを目標とするが、それが通用できなくなれば、やむを得ず世俗から身を引き隠棲すべきであると述べている。つまり、隠逸の行為は世俗から身を引くことで保身を図る老荘思想が士大夫たちに広く受け入れられ、政治や社会に抵抗する形で実現するものであると言えるよう。

隠士が具体的に登場する最初の文献は『論語』と『莊子』であることは、上田武「中国古代の隠逸思潮と陶淵明(上)」によって論証されている。⁴⁾『論語』微子篇に「世を辟くるの士」として長沮・桀溺が挙げられ、また同じく微子篇に「逸民」として伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連らが挙げられている。また、『莊子』逍遙遊篇に許由、接輿、莊周及び、斉物論篇の南郭子綦、王倪、長梧子などを代表とする多くの隠者が取り上げられている。中でも、野に隠れて自己の志を探求した長沮・桀溺、周の武王の殷への討伐行為を非難し、首陽山に隠れて薇を食ってついに餓死したと伝えられる伯夷、叔齊、または堯から仕官するように勧められ、それを聞いて耳が汚れたと潁川で耳を洗ったと伝えられる許由、いずれも高潔な隠士の代表として広く知られている。

彼らはいずれも為政者の権力に屈せず自らの節操を貫き、俗世間と離れたところで、自己実現をはかった人物である。しかし、細かく言えば、伯夷、叔齊を含む一部の士人は、社会の混乱や政治の腐敗といった現実社会に抵抗するため世俗から遠く離れて隠棲したものである。一方、許由を含む一部の士人は政治権力に縛られず、悠々自適の生活を追いつめて隠居したものである。このように、従来の隠逸思想のあり方について、胡山林「唐代隠逸士人の類型と分析——『逍遙自適』の理念を中心として」⁵⁾は、現実批判型と逍遙自適型に分類しており、筆者もそれに賛成したい。先秦から南北朝時代にかけて王朝の興亡が相次いだ乱世において、政治的な関与が身の危険を及ぼすことを恐れた文人たちは、政治活動よりも、文学、哲学、宗教など精神的自由な世界を追いつめ、老莊思想を展開し、無為の思想に基づいて清談を重んじた結果、漢代の現実批判型の儒家的隠遁と打って変わり、道家的要素を帯びた自適型のほうが主流となつていった。

後漢以降、隠逸に関する議論が展開され、中国文学の飛躍的な発展を成し遂げた六朝及び唐宋時代に隠逸思想が文学の中に定着し、多様化した様子を次の節で論じたい。

三 隠逸思想の展開について

隠逸思想が非常に流行したのは六朝時代である。先秦から六朝時代にかけて、高節の士が多く横死して以来、文人たちは積極的に政治に参加する儒学の礼制に反し、世俗から身を引くことで保身を図る老莊思想を尊重し、隠逸の風潮が自然への回帰、田園や山水の美、現実を超えた仙界への志向などを詠う様々な詩の世界を形成した。更に、隠逸に関する議論も活発に行われ、大隠、小隠、身隠、道隠などと隠逸の多様な姿勢も出揃う。

隠者や隠逸の世界を詩に詠うのは後漢の終焉の頃からである。西晋時代に世塵を避けて竹林に会し清談を事とした竹林の七賢（阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎）をはじめ、潘岳、左思、陸機、東晋の王羲之、「古今隠逸詩人の宗」と称された陶淵明（鍾嶸『詩品』中品・陶淵明評）、また南朝の山水詩の開祖として名を馳せた謝靈運及び沈約の作品に隠逸思想が多く詠われている。彼らはいずれも仕官していたとは言え、清らかな自然に囲まれた隠逸的生活に深い関心を寄せた文人であり、六朝時代の隠逸思想を文学の中に展開させた隠逸的詩人でもある。中でもとりわけ、左思の「招隠詩」、潘岳の「帰田賦」、王羲之の「蘭亭集序」、陶淵明の「飲酒」二十首には、当時の文人たちの理想とする隠逸的生活の様子が具体的に且つ鮮明に描き出されている。例えば、

左思「招隠詩」（『文選』卷二十二）

杖策招隠士 策を杖いて隠士を招ねんとす

荒塗横古今 荒塗は古今に横がる

巖穴無結構 巖穴には結構無く

丘中有鳴琴 丘中には鳴琴有り

白雲停陰岡 白雲は陰岡に停まり

丹葩曜陽林 丹葩は陽林を曜らす

石泉漱瓊瑤

石泉は瓊瑤を漱ぎ

纖鱗亦浮沈

纖鱗も亦た浮沈す

非必糸与竹

必ずしも糸と竹とは非ず

山水有清音

山水に清音有り

何事待嘯歌

何ぞ嘯歌を待つを事とせん

灌木自悲吟

灌木は自ら悲吟す

秋菊兼糗糧

秋菊は糗糧を兼ね

幽蘭間重襟

幽蘭は重襟に間る

躊躇足力煩

躊躇して足力煩う

聊欲投吾簪

聊か吾が簪を投ぜんと欲す

策をついて隠者を訪ねて行くと、荒れた道が昔も今も人の通らぬままふさがっている。岩穴には立派な家などないが、丘の中から琴の音が聞こえてくる。白い雲は山の北側にとどまり、赤い花は山の南の林に美しく咲いている。岩間を流れる水は玉のような石を洗い、小さな魚は浮いたり沈んだりして泳いでいる。音楽は必ずしも糸や竹に限ることはない。山や泉にさわやかな音色があるのである。またどうして歌を謡う必要があるのか、あたりの灌木は風に応じて自然に哀愁のしらべを発している。秋菊は見て楽しませてくれるだけでなく食用にもなるし、奥ゆかしい蘭は重ね着の飾りにもなる。うろうろしているうち、足がぐたびれてしまった。いつそ役人生活を辞めて、この山中に留まりたいものである。

白い雲、赤い花、清らかな谷川、風や木によって奏でられる自然の音楽等々、美しい自然に囲まれた隠者の世界を生き生きと描き、憧れを感じた心情を表している。「招隠詩」は両晋時代に盛んに作られた題材であり、『文選』巻二十二に当時の代表的詩人陸機、張華などの作品を収めている。しかし、それらの作品は隠士を招き、彼らに仕官を

勧める内容ではなく、自然に囲まれた隠逸的生活を賛美したものである。一方、このような、個人の自由と自適のために山水に隠遁するというあり方は、先秦時代の士人たちが唱えた道のために隠逸する、或いは現実社会への不満と抵抗のために隠逸するというあり方と異なる傾向があると思われる。

左思の「招隱詩」の内容を否定するかのように山中の厳しさを詠ったのは晋・王康琚の「反招隱詩」である。彼は、「小隱隱丘藪、大隱隱朝市。伯夷竄首陽、老聃伏柱史」（小隱は山林に隠れ、大隱は朝廷に隠れる。伯夷は首陽山に隠れ、老子は柱史の役人になった）と述べ、首陽山に隠棲した伯夷、叔齊を「小隱」、宮廷の図書係として生きた老子を「大隱」と称し、山林に隠れ住まず、かえって俗人とまじって市井に隠棲したほうが良いと主張した前漢・東方朔の意見と類似すると考える。一見、これは左思の理想とする隠逸のあり方とは異なるが、しかし当時身を朝廷におきながら心は山林を思う、六朝時代の知識人に共通する隠逸的思想の風潮をよく表していると思われる。

六朝時代、隠逸的思想を文学の中に広めたのは陶淵明である。彼は、「我五斗米の為に腰を折って郷里の小人に向かう能わず」と言い、彭澤県の県令に赴任してわずか八十日余りで辞して郷里の田園に帰り、隠者としての暮らしを送った。彼の名作「歸去來辭」、「歸園田居」五首、「飲酒」二十首、「雜詩」十二首、「移居」二首、「桃花源詩」をはじめ、田園という素朴な環境を舞台に、世俗を拒否した高雅な境地を描いた多くの作品は、隠逸文学の一つの流派を形成し、後代の隠逸的詩人に大きな影響を与えたことは今更言うまでもない。彼に精神的愉悅をもたらした「彈琴」、「讀書」、「飲酒」、「交友」の自適な隠逸の世界はまさしく唐宋時代の文人たちの理想とする隠逸的境地でもあった。

隠逸思想が文学の中に頻繁に見られるようになるのは唐代に入ってからである。唐代に至っては、科擧の落第や仕官の失敗などによる隠遁が少なくないが、彼らは決して仕官への欲求が薄かったわけではない。胡山林「初盛唐期に於ける士人の別荘生活と『仕隱』の風潮について」によれば、盛唐に至っては、多くの文人は仕官生活を送りながら、高い精神的生活を構築するため、山中や家郷の近くに別荘を構え、隠逸的生活を体験し、「仕官」と「隠逸」の融合を図る風潮が主流であった。^⑧白居易の詩にしばしば用いられる「吏隱」や洛陽に赴任した後提唱した「中隱」から

もその傾向を窺うことができる。胡山林「白居易の『中隱』思想について」は、「吏隱」と「中隱」は共に官位にしながら隱逸生活を送ることである。しかし、「吏隱」は官位の低いもの、「中隱」は官位の高いものが隠士と同じような生活を楽しむことを意味すると記されている。^⑨このような隱逸的志向には、現実社会への批判や不満などの傾向はもはやなく、個人の主観的情趣や精神的自由を最も重要な目的として見と見取れる。例えば、

白居易「中隱」

大隱住朝市

大隱は朝市に住み

小隱入丘樊

小隱は丘樊に入る

丘樊太冷落

丘樊は太だ冷落

朝市太喧囂

朝市は太だ喧囂

不如作中隱

如かず中隱と作り

隱在留司官

隱れて留司の官に在るには

似出復似処

出づるに似て復た処するに似たり

非忙亦非閑

忙しきに非ず亦閑なるに非ず

不劳心与力

心と力とを勞せず

又免飢与寒

又た飢と寒とを免る

終歲無公事

終歲公事無く

隨月有俸錢

月に従つて俸錢有り

君若好登臨

君若し登臨を好まば

城南有秋山

城南に秋山有り

君若愛遊蕩

君若し遊蕩を愛せば

城東有春園

城東に春園有り

君若欲一醉

君若し一醉を欲せば

時出赴賓宴

時に出でて賓宴に赴け

洛中多君子

洛中に君子多し

可以恣飲言

以て飲言を恣にすべし

君若欲高臥

君若し高臥を欲せば

但自深掩閤

但だ自ら深く閤を掩え

亦無車馬客

亦た車馬の客無く

造次到門前

造次門前に到る

人生処一世

人生まれて一世に処る

其道難兩全

其の道兩つながら全くし難し

賤即苦凍餒

賤ければ即ち凍餒に苦しみ

貴則多憂患

貴ければ則ち憂患多し

惟此中隱士

惟だ此の中隱の士のみ

致身吉且安

身を致すこと吉にして且つ安し

窮通与豊約

窮通と豊約と

正在四者間

正に四者の間に在り

これは白居易が洛陽分司の太子賓客として履道里に住んでいたころの作品である。彼は王康琚の提起した「大隱」も、「小隱」も否定し、宮廷でもなく、山林でもなく、むしろ都の長安を離れたところで俸禄を受けるが、大した仕事をせず、隠逸的生活を享受できる「仕」と「隠」を持ち合わせた「中隱」の形式を称えている。白居易の「中隱」

思想は、士人たちの長期に及んで直面してきた「仕官」と「隱逸」を両立させた理想的な隱逸のあり方であり、唐代だけではなく、後の北宋の文人歐陽脩や蘇軾らもそれを理想とした。

一方、北宋以降、特に金、元など非漢民族王朝における士大夫層の隱逸傾向が一段と強くなった。王朝交替期において詩人の愛国心及び、新王朝における民族政策などの要因により、漢人知識人が仕官を拒否し、或いは立身出世の道を諦めて隱棲するという現象が多く見られる。彼らは、東晋が滅んでから劉宋への仕官を拒否し、自らの節操を守り抜いた陶淵明に、詩人自身の境遇を重ねて悲嘆した作品を多く生み出している。とりわけ、科挙制度が廃止され、文人の道が塞がれた金末元初の王朝交替の時期において金、南宋の多くの文人は、自らの立場を失い、モンゴル王朝に仕官することを拒否し、政治の場を離れて隱遁するものが増えた。

金末及びモンゴル王朝の初期を生きた耶律楚材も隱逸的思想を詠った作品を多く残した詩人の一人である。彼は終始官位につき、隱棲することはなかったが、隱逸的思想をしばしば詩に詠じた。以降は、耶律楚材の隱逸を志向した背景を探ると同時に、彼の隱逸観について述べたい。

四 耶律楚材の隱逸志向

耶律楚材は若い頃から「修身、齊家、治國、平天下」を志す儒家的思想が強く、政治的理想を実現したいがために官吏の道に執着していた。「沢民致主本予志、素願未酬予恐惶」（民を沢し主に致すは本より予が志。素願未だ酬えられざるは予の恐惶するところ）（『文集』卷二「用前韻感事二首」）、「沢民致主傾丹懇、邀利沾名匪素心」（沢民致主丹懇を傾け、利を邀め名を沾るは素心に匪ず）（『文集』卷四「和李邦瑞韻二首」）、「致主沢民元素志、陳書自薦我無由」（致主沢民は元よりの素志、書を陳ね自らを薦むるも我れは由無し）（『文集』卷五「感事四首」其二）「行道沢民、亦僕之素志也」（道を行い民を沢するも亦た僕の素志也り）（『文集』卷八「寄趙元帥書」）などの句からも仕官への強い願望を窺い知ることができる。

一方、耶律楚材は中央アジア遠征から燕京に戻ってから、隱逸的志向をしばしば表している。彼の『文集』に収められている隱逸に関する作品は百五十首近くあり、そのほとんどが一二三二年から一二三六年までの間に作られたものである。その時期、耶律楚材は編修所を燕京に、経籍所を山西の平陽に設置したほか、戸籍を作り、税制を定めるなど諸政策の推進にあたっていたことは、『元史』『耶律楚材伝』や『耶律文正公神道碑』に記録されている。しかし、實際各地の地方官はほとんどモンゴル人であり、耶律楚材の権限は非常に限られたものであったため、おそらく自らの志を十分に成し遂げることができなかったと思われる。その不満の裏返しとしての隱逸であることを先に示しておきたい。

管見では一二二七年、チンギス汗の死後に創作した「過雲中和張仲先韻」（『文集』卷三）と「過天城和斬沢民韻」（『文集』卷三）は、耶律楚材の隱逸志向を表した最も早い時期の作品であると思われる。そこに、彼は長年政治の場にながら、自らの力を存分に發揮できない虚しさを訴えている。具体的な例を見てみよう。

過雲中和張仲先韻

致君沢民本不難 君に致し民を沢すは本より難からず

言輕無用愧偷安 言輕く用なく偷安を恥ず

十年潦倒功何在 十年の潦倒功何にか在る

三逕荒涼盟已寒 三逕荒涼たり盟已に寒し

岩下藏名思傳說 岩下に名を藏せし傳說を思い

林間談道謁豐干 林間に道を談ぜし豐干に謁す

掛冠神武当歸去 冠を神武に掛けて当に歸り去るべし

自有夔竜輔可汗 自ずから夔竜有りて可汗を輔けん

君主に忠勤を尽くし、人民に恩沢を与えることは本より難しいことではない。輕はずみなことを言うだけで、

大して役に立たない私が、目先の安樂をむさぼるのを恥ずかしく感じる。この十年間、宮仕えの落ちぶれ者として過ごしてきたため、勲功などどこにも見当たらない。我が故郷の家屋敷はすでに荒れ果てたのに、すぐに帰還するとの約束を果たせなくて心苦しい。殷の高宗の求めを避けて名を隠し、岩下に隠れた傳説を思い、身を縮めて岩の縫中に隠れた、唐の豊干のことをしのぶ。さて私は、衣冠を神武門に掛けて辞職した梁の陶弘景のように、早く引退して故郷に帰るべきだ。私のような人間が去っても、舜の二人の名臣夔と竜のような人が太宗を輔佐してくれるであろう。

耶律楚材はそもそも占星術師として中央アジア遠征に加わり、チンギス汗から深い信頼を得て「此人天賜我家、汝他日国政当悉委之」（此の人、天の我家に賜わるなり。汝他日国政は、当に悉く之に委ぬべし。）と述べるに至ったことは『元史』『耶律楚材伝』に明記されている。しかし、それとは裏腹に、王朝交代の最中モンゴル王朝に仕官した耶律楚材は、抵抗し続ける前王朝の遺臣や文人たちの批判を強く浴びる一方、モンゴル王朝からも前王朝の遺臣として警戒された。政治の場において一人孤独であったことが、隠逸を志向した最も大きな原因であることはこの詩の背景からも容易に推測できる。しかし、この段階ではまだ彼の理想とする隠逸生活のあり方が具体的に描かれていない。耶律楚材の隠逸的志向が最も頻繁に表されたと思われる一二三二年から一二三六年までの作品に、詩人の隠逸を志向した理由が明確に述べられている。例として『用李德恒韻寄景賢』（『文集』卷二）を挙げよう。

牢落十年扈御營

瑶琴忘尽水仙声

酷思詩酒閑中樂

見說干戈夢裏驚

林下因緣千古重

人間富貴一錢輕

牢落の十年御營に扈う

瑶琴忘れ尽せり水仙の声を

酷思す詩酒閑中の樂みを

説くならく干戈夢裏の驚きを

林下の因縁は千古に重んじられ

人間の富貴は一錢よりも輕し

此身未退心先退 此の身未だ退かざるに心先ず退く

独有竜岡識我情 独り竜岡有りて我が情を識れり

寂しさを胸にして十年間天子の御陣にお供し、美しい音を出す琴で水仙の曲を弾くことすら、すっかり忘れてしまった。切に思われることは、閑中の楽しみというべき詩酒に親しむ事である。戦争に関する話を聞くと、はつとして立ち上がることもある。官をやめて隠退することは、遠い昔から尊重されてきたことである。世間の富貴というものは、たったの一銭よりも価値のないものである。我が身は未だ公職から引退してはいないが、心は早くも世間から退いている。ただ一人竜岡居士だけは、我が胸のうちをよく知っていてくれる。

右の詩からも窺えるように、耶律楚材はチンギス汗の西征した軍隊に随行した十年間、無残を極める戦争の有様を目の当たりにしてから、功績と高い地位を追い求める儒家達の人生観に動揺を抱くようになり、琴、詩、酒を存分に樂しめる平和且つ奥行きのある隠者の生活に憧れていったと思われる。

彼の目標とする「琴、詩、酒」の隠逸的生活のあり方は正しく六朝時代の陶淵明の田園生活を想起させる。六朝以降唐代の王績、孟浩然、王維、李白、韋応物、柳宗元、白居易、宋代の蘇軾をはじめ、金代の文人も多く自らの節操を守り貫いた陶淵明を憧憬し、彼の高尚な人格を詠い、彼の詩句を引用するなどをした。耶律楚材も従来の文人たちと同様に、陶淵明の人格を尊敬する一方、琴、詩、酒を友にした悠々自適な田園生活に憧れている心情を詠じている。例えば、

和黃華老人題猷陵吳氏成趣園詩（『文集』卷二）

丁年彭沢解官去 丁年彭沢に官を解きて去り

遨遊三径真三友 三径に遨遊して三友を真とす

悠然把菊見南山 悠然として菊を把り南山を見

暢飲東籬醉重九 東籬に暢飲して重九に酔う

猷陵吳氏治荒園

猷陵の吳氏 荒園を治し

成趣為名良可取

趣を成せるを名となす、良に取る可し

養高不肯事王侯

高きを養い肯て王侯に事えず

閑卧林泉了衰朽

林泉に閑卧して衰朽を了う

今年扈從過秦川

今年 扈從して秦川を過ぎり

可憐尚有蕭條柳

憐れむ可し 尚お蕭條の柳有りしを

婦計甘輪吳子先

婦計甘輪 吳子の先

麗詞已後黃華手

麗詞已後 黃華の手

知音誰聽斷絃琴

知音 誰か断絃の琴を聴かん

臨風痛想紗巾酒

風に臨み痛く想う 紗巾の酒

嗟乎世路声利人

嗟乎 世路声利の人

不知曾憶淵明否

知らず 曾て淵明を憶いしや否や

陶淵明は壮年の時彭沢令を辞めて、田園の居に帰り、幾つかの小径のついた荒園に遊び、琴、酒、詩を真実の友とした。悠然として菊を愛で南山を眺め、東籬のもとでとことん飲んで九月九日の節句に酔いしれていた。猷陵の吳徳明は荒園を直し、自分の趣向に適わせたのでこれを園名としたが、まことになるほどとうなずける。節を守つて王侯に仕えず、故園の自然にゆつたりと自適して年をとつた。今年太宗に供奉して秦川（甘肅省秦州を流れる川）を渡つたが、可憐にも枯れかけた柳がなお残っているのが目についた。私の帰郷の計は見事に破れてうな己の心中を察しうる真の友がおろうか。向かい風に吹かれながら薄絹の頭巾をかぶり、酒盃を手にして淵明を想う黃華老人のことが偲ばれてならない。ああ、世の中の名利に振り回されている人たちは、一度だつて陶淵

明の清節を想ったことがあつたであらうか。

この詩は、最初の詠い起こしに陶淵明の「飲酒」其五「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る」の詩句を踏まえ、政治の場から身を引き、「琴、酒、詩」を楽しむ悠々自適な田園生活を送った陶淵明を想起し、彼と同じように田園生活を送っている猷陵（河北省昌平県）の呉大卿徳明をとりあげ、羨む気持ちを表している。ほかに、「白雁来時思北闕、黄花開日憶東籬」（『文集』卷二「思親有感」其二）、「琴書習氣終難忘、巖麓荒園怎得還」（『文集』卷三「寄景賢二十首」其五）、「琴斷五絃忘旧譜、菊荒三径負束籬」（『文集』卷六「思親用旧韻」其二）、「故山松径碧、旧隱菊花黃」（『文集』卷九「和張敏之詩七十韻」其三）などの詩句にも陶淵明の悠々自適的隱逸生活に憧れを抱いている様子が窺われる。

このように、耶律楚材は隱逸的生活への憧憬を積極的に詩の中に展開してはいるが、實際に彼は終生朝廷に仕え続け、隱逸生活を送ったことは一切ない。それでは、耶律楚材は官界に身を置きながら隱逸へ憧憬するというのは一体どういうことであらうか。この問題を明かすには、彼の隱逸観を考察しなければならない。

五 耶律楚材の隱逸観

耶律楚材は二十歳前後で朝廷に仕えてから、終生官僚であり続けた。しかし、時折隱逸的生活に心を寄せていた。彼の思い描いた隱逸的世界とはどのようなものであろうか。従来の文人に見られる隱逸のあり方には大隱、小隱、中隱、吏隱、真隱、旧隱などと様々な様相がある。耶律楚材が最終的な歸着点として考えているのは、彼の幼年時代を送った場所と思われる医巫閭山に歸つてのんびり過ごすこと、つまり旧隱である。『文集』において旧隱を主張した作品は十三篇に上っている。医巫閭山は遼寧省北鎮県にあり、耶律楚材の八世の祖である耶律倍がそこで閑居生活を送った後、そこに葬られてから、耶律楚材の父耶律履が居を構え、履及び耶律楚材の二兄の弁才（一一七一—一二三七）、善才（一二七一—一二三二）がその付近に葬られている。医巫閭山での隱逸的暮らしについて『文集』

卷十四「信之和余酬賈非熊三字韻見寄因再賡元韻以復之」に次のように詠っている。

旧隠翳閭白霽南

旧隠の翳閭は白霽の南

故山佳処好停驂

故山の佳処は驂を停むるに好し

貪嘖癡者元無一

貪嘖癡なる者元より無一

詩酒琴之樂有三

詩酒琴之れ樂しみ三有り

菱芡香中横短艇

菱芡香中に短艇を横たえ

松筠声裏称危菴

松筠声裏に危菴を称う

有人問道来相訪

人有り道を問い来たりて相い訪わば

一碗清茶不放参

一碗の清茶は放参ならずやと

耶律家のもとの棲家医巫閭山は、白霽族の住む国の南にある。その故郷の景色のよいところは、四頭だての馬をとどめるのに快適である。煩惱のもととなる貪嘖癡におかされている者は、もともと無仏性である。私にとつては詩、酒、琴という三つの楽しみがある。ひしや水草の香りの漂うところへ小船を漕ぎ、松竹に吹く風の響き渡るところの庵をよしとする。誰か道を尋ねてくる人がいたら、放参飯の代わりに一碗の清しいお茶を飲ませよう。

耶律楚材の求める隠逸的世界とは、現実の生活に心を煩わされない平静な世界、または脱俗的な高い精神的境地であり、道家思想と密接に結びついた仏教思想が混然と一体になったものであると思われる。彼は官界を離れた故郷の美しい自然風景の中にいてこそ恬淡無欲の心境になりうるし、そこで老荘の道を体得しようと考えていたのかもしれない。しかし、彼の求めている隠逸の世界は決して六朝時代に流行した超俗的神仙的世界ではなく、詩、酒、琴を樂しむといった個人の情趣を重んじた現実的生活である。この傾向が多くの隠逸的思想を詠った作品に共通しており、彼の隠逸のあり方の特徴付けられるものであると言える。例えば、

過天城和斬沢民韻（『文集』卷三）

西征扈從過竜庭 西征に扈從して竜庭を過ぎる

悞得東州浪播名 悞りて東州と浪りに名を播らすことを得たり

琴阮因縁真有味 琴阮の因縁 真に味有り

詩書事業拙謀生 詩書の事業 生を謀るに拙なし

咄嗟興廢悲三歎 咄嗟の興廢に悲しみて三歎し

倏忽榮枯夢一驚 倏忽たる榮枯は夢一驚す

何日解官歸旧隱 何れの日にか官を解きて旧隱に歸る

満園松菊小菴清 満園の松菊に小菴清まらん

太祖の西征に従い、匈奴の天を祭る竜庭を訪れた。手違いで私は、宋の范諷が磊落な振る舞いを演じて世の人から東州逸党と称されたように、みだりに名を撒き散らすこととなった。蘇東坡が所蔵していた名琴を手に入れた因縁は、誠に興味深いことであった。詩書のほか何の才能もない、世渡りの下手な人間だからである。物事の咄嗟の興廢に悲しんだり、嘆いたりするばかりである。たちまち榮えることと衰えることは夢の中の一驚に過ぎない。私はいつになったら退官して故郷に帰ることができようか。庭いっぱい生えた松と菊、それに私の庵もきつとさわやかで清浄そのものであろう。

そのほかにも「尚記吾山旧隱居、松風蕭瑟松花落」（尚記す吾山の旧隱居、松風蕭瑟として松花落つるを）（『文集』卷一「和移刺繼先韻三首」其一）、「閭山旧隱天涯遠、夢裏思歸夢亦難」（閭山の旧隱は天涯に遠く、夢裏に歸らんと思えども夢も亦た難し）（『文集』卷一「和薛伯通韻」）、「他年歸去無相棄、同到閭山旧隱居」（他年歸り去りて相い棄つること無く、同に閭山の旧隱居に到らん）（『文集』卷三「和移刺子春見寄五首」其五）、「十載殘軀遊瀚海、積年歸夢遶閭山」（十載の殘軀を瀚海に遊ばせ、積年の歸夢閭山を遶る）（『文集』卷三「寄景賢一十首」其三）、「何時致政

閨山去、三径依然松菊寒」（何れの時にか政を致し閨山に去かん、三径依然として松菊寒し）（『文集』卷七「和武善夫韻二首」其一）、「湛然有幽居、祇在閨山陰。茅亭遶流泉、松竹幽森森。攜琴当老此、歸去投吾簪。」（湛然に幽居有り、祇だ閨山の陰に在るのみ。茅亭に流泉を遶らし、松竹幽かに森森たり。琴を攜さえ当に此に老ゆべし、歸去せんとして吾が簪を投ぜん）（『文集』卷十「鼓琴」、「早晚掛冠去、閨山結茅屋」（早晚冠を掛け去り、閨山に茅屋を結ばん）（『文集』卷十一「冬夜彈琴頗有所得乱道拙語三十韻以遺猶子蘭」等々旧隠について詠った作品が多い。

耶律楚材は隱逸的生活に懂れたのは、妄念を離れた「無心」の境地に精神的な開放感と満足感を得るためである。彼は十年間も政治の場に身をおきながら、己の志を伸ばすことができなかったことを嘆き、功績を収め治国のために献身するという儒家的思想、現世的思想から逃れ、精神の自由を求める自適の意識が強く感じられる。例えば、

和李振之二首（『文集』卷四）

半紙功名未可呈 半紙の功名未だ呈す可からず

無心何処不安生 無心何処にか生に安んざらん

十年滄海塵空起 十年滄海に塵を空しく起こし

百歲黃梁夢乍驚 百歲黃梁に夢乍ち驚かる

旧径既荒松菊在 旧径既に荒れたれど 松菊在り

丹誠不變鬢髯更 丹誠不變なれど 鬢髯更まる

紙半ぺらに匹敵する功名など、人様には未だ差し上げることができない。無心というものを身に付ければ、何処にも不安というものは生じない。私は十年間も砂漠にあつて砂塵を空しく巻き起こした。百年の富貴をきわめた夢もたちまち醒めて驚かされる始末である。我が故郷の昔ながらの小道は既に荒れ果てたが、松と菊はまだ生えているであろう。私の天子に誓う真心は変わらないが、鬢や髯の色は白くなってしまった。

では、耶律楚材の詩に描かれた理想とする閑居生活とは何か。

前節でも少し触れたように、彼は閑居生活について、同時代の文人と同じく、陶淵明を通して自分の目指すべき隠逸生活のあり方を思いついて描いている。しかし、彼は陶淵明を高潔な人格者としてとらえるのではなく、静かに満ち足りた隠逸生活を実現した人としてとらえている。例えば、

和景賢還書韻二首其二（『文集』巻二）

淵明幽隱掩柴関　淵明の幽隱は柴関を掩い

琴已忘絃人亦閑　琴已に絃を忘れれば人も亦閑なり

静倚書牕独寄傲　静かに書牕に倚り独り傲を寄せ

笑観庭樹自怡顔　笑いて庭樹を観て自ずから顔を怡ばす

淵明の俗世間から離れた住まいは、柴の門が閉ざされている。琴はすでに絃が切れ、人もまたゆったりと落ちて着いている。静かに書斎の窓辺により、一人くつろぎ、笑みを浮かべながら庭木を眺め、自然とその喜びにひたっている。

ここに描かれた陶淵明の「琴」と「詩」を友とする閑適的生活は、まさに耶律楚材自身の描いている理想的な隠逸生活ではなからうか。俗世間と遠く離れ、大自然に囲まれて「弹琴」、「吟詩」を心行くまでに楽しむ、といった暮らしに憧れていることが窺える。

このように、耶律楚材が隠逸を志向し、理想的な隠逸的生活を具体的に詠出している。しかし、彼は終始官界を離れることがなく、『文集』巻二「和移刺繼先韻二首」に「漸驚白髮寧辞老、未済蒼生曷敢帰。」（漸く白髪に驚く、寧ろ老いを辞せん、未だ蒼生を済わず、曷ぞ敢えて帰らん。）、また『文集』巻四「和武川嚴重之見寄五首」其一に「何日功成帰旧隠、五湖煙浪樂余生」（何れの日にか功成りて旧隠に帰り、五湖の煙浪に余生を樂しまん。）、其五に「故園日夜帰心切、未済斯民不敢行」（故園に日夜帰心切なり、未だ斯民を済わずんば敢えて行かず。）と述べている。つまり、彼は「経世済民」の使命感を抱いているため、隠逸を望みながらも実際そこまで踏み切れず、ただ俗世間にお

ける自らの煩惱を追ひ払うための精神的な抛り所として「隱逸」を謳歌しているように見受けられる。一般的に、「仕官」は士人に社会的地位を与えるが、「隱逸」は心の安らぎと愉悅感をもたらしてくれる。耶律楚材は社会と個人のはざままで苦悩し、一方では「經世済民」を達成したいし、一方では悠々自適な生活を享受したいという両者の間に揺れ動く心情を抱いているにも関わらず、「仕官」と「隱逸」のいずれか一つを目指すことができない優柔不断な自分をひそかに嘲笑つてもいた。例えば、

題昭上人松菊堂（『文集』卷七）

晴煙蒼節出墻青　晴煙に蒼節　墻より出でて青し

斜日黃華隔檻明　斜日黃華　檻を隔てて明らかなり

松菊尚存歸未得　松菊　尚存すれども歸ることを未だ得ず

湛然真箇太憨生　湛然　真箇に太憨生

かすみ立つ晴れた日に、若い竹の節が垣根より頭をもたげて青くみえる。菊花が夕日に映え、手すりごしにはつきりとみえる。この園には、松や菊はまだ生えているが、私はまだ故山へ帰ることができていない。湛然は本当に大馬鹿者だから。

耶律楚材は隱逸的生活によつて精神的な愉悅感を得られることに憧れていたものの、仕官への願望も決して捨てられなかった。堯舜の時代を理想とする耶律楚材は、名譽利達ばかりを追ひ求める腐敗した官界に不満を抱き、隱逸を表明することで少しでも自らの抵抗及び不満を表そうと考えたのかもしれない。

儒家社会の政治的理想を実現できなかった、或いは挫折したとき、仏教思想及び道教思想へ傾いたのは、やはり現実の生活に心を煩わされない俗世間を離れた自然風景の中にいてこそ恬淡無欲の心境になりうるし、そこに心の安らぎを求めるためであると思われる。このように、彼の詠じた隱逸の世界とは、道家思想と密接に結びついた仏教思想が混然と一体になったものである。しかし、このような隱逸の世界は決して六朝時代に流行した超俗的神仙的世界で

はなく、唐代のような政治参画のための手段でもなく、ただ詩、酒、琴を楽しむといった個人の情趣を重んじた現実的生活である。一方、耶律楚材は終始官界を離れることができなかったのは、彼の教養の根底にあるのは儒教であり、儒家としての「経世済民」の使命感があるからだと思われる。このように、耶律楚材は儒教、仏教或いは道教に偏ることなく、仏教的思想を表す表現の中に道教的、儒教的思想が秘められており、三教思想のいずれかに分類することはできない。耶律楚材の儒道仏を包括する姿勢は、混乱した時代にあるべき姿を追求したものであるのみならず、その時代の風尚を体现したものであると考えられる。

六 終わりに

今まで検討してきたように、耶律楚材は若い頃から「修身、齐家、治国、平天下」を志し、儒家的思想が強かった。一方、彼は琴・詩・酒を楽しむ悠々自適な隠逸的生活に心を寄せた作品を多く残している。それらの作品の内容は、主に現政権における政治腐敗への批判、自己の才能の乏しさを悲嘆したものである。作品全体から詩人の隠逸への強い意志は見られず、現政権への不満の表明としての隠逸であると思われる。

また、彼の詩に詠じた理想とする隠逸的生活は、陶淵明の田園生活のような琴・詩・酒を友とした自適型である。俗世間から離れ、権力に束縛されないと、詩人自身の精神的愉悦を得ることを目標としている点は、耶律楚材を含む金末元初における多くの文人に共通する隠逸的考えであり、決して独創的ではない。

一方、折に触れて政治への抱負を詠っており、仕官と隠逸の間に揺れ動いているように見受けられるが、終始官途への執念を断ち切ることができなかった。それは、やはり儒教の道においてこそ自己価値を實現できると考えたからだと考えられる。

注

- (1) 耶律楚材の伝記と年譜については、元・宋子貞「中書令耶律公神道碑」（『国朝文類』所収）、元・蘇天爵「元朝名臣事略」中書耶律文正王（『百部叢書集成』所収）、明・宋濂「元史」耶律楚材伝、民国・柯邵忞「新元史」耶律楚材伝と王国維「耶律文正公年譜」（『王国維遺書』商務印書館 一九四〇年に付録）等々を参照して整理したものである。
- (2) 耶律楚材の集、『湛然居士文集』のテキストには、『四部叢刊』本、文淵閣の『四庫全書』本、『漸西村舍彙刊』本がある。その中、『四部叢刊』本と『四庫全書』本は同じ底本を用いているが、『漸西村舍彙刊』本は更に芳郭無名人の後序を加え、また巻七の最後に李文田による跋語が収録されているほか、詩文の中に小注を加えている。なお、本論文で用いた『湛然居士文集』のテキストは、『四部叢刊』本を底本とし、『漸西村舍彙刊』本を参照して作られた謝方点校『湛然居士文集』（中華書局 一九八六年）である。引用文と書き下し文の文字を常用字に統一した。
- (3) 上田武「中国古代の隠逸思潮と陶淵明（上）」（茨城大学人文学部『紀要』人文学科論集二十九号 一九九六年）、西村富美子「中唐詩人の隠逸思想——白居易の吏隠・真隠」（大谷大学文芸学会『中国文学論叢』文芸論叢四十二号 一九九四年）、松浦崇「逸民伝・高士伝を通して見た隠逸思想の展開」（福岡大学『人文論叢』第二十巻第二号 一九八八年）。
- (4) 上田武「中国古代の隠逸思潮と陶淵明（上）」（茨城大学人文学部『紀要』人文学科論集二十九号 一九九六年）。
- (5) 胡山林「唐代隠逸士人の類型と分析——『逍遙自適』の理念を中心として」（九州中国学会『九州中国学会報』第三十七巻 一九九九年）。
- (6) 『史記』巻一二六滑稽列伝「朔曰、如朔等、所謂避世於朝廷間者也。古之人、乃避世於深山中」。
- (7) 唐代隠逸士人と類型の分析について、古川未喜「唐代の隠士群と隠遁パターン」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第二十六巻 一九九七年）及び、胡山林「唐代隠逸士人の類型と分析——『逍遙自適』の理念を中心として」（九州中国学会『九州中国学会報』第三十七巻 一九九九年）にて詳しく論じられている。
- (8) 胡山林「初盛唐期に於ける士人の別荘生活と『仕隠』の風潮について」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第

二十六卷 一九九七年。

- (9) 胡山林「白居易の『中隠』思想について」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十五卷 一九九七年)。
- (10) 拙稿「耶律楚材の仏教思想に関する一考察」(お茶の水女子大学『中国文学会報』第三十卷 二〇一一年)を参照されたい。